

生文研メール

5号

平成 18年 07月 13日

Ver. 1.0.1

生活文化研究所

〒700-8516

岡山市伊福町 2-16-9

ノトダム清心女子大学

e-mail

ricch@post.ndsu.ac.jp

目次

日本人と海藻のかかわり(5)	
ウップルイノリとアサクサノリ	今田節子 1
石に刻まれた六部	小嶋博巳 2
体験的生活文化史 昭和編 その五	新田義之 4
『ザ・有頂天ホテル』と『世間胸算用』	
西鶴研究こぼれ話 ⁵	広嶋 進 5
不思議な出会い(その五)	
ハワイの日系社会と坂巻ファミリー	横山 學 7
編集後記	

日本人と海藻のかかわり(5)

ウップルイノリとアサクサノリ

今田節子

日本近海には六〇〇種類にもおよび紅藻類が自

生しているといわれるが、現在でも家庭料理として多用されているのはノリだけといっても過言ではない。「ノリ」「岩ノリ」の名称はアマノリ類の総称であるが、なかでも日本海沿岸のウップルイノリ、瀬戸内沿岸や太平洋沿岸のアサクサノリが代表的な種類であり、それらの利用の歴史は古い。祭りや誕生日、運動会の海苔巻きを特別なごちそうとして思い出す者は少なくない。ノリはいずれの地域にあっても、コンブと並び「祝いの海藻」というイメージが強いものであった。冬場の荒波を受けながらの採取は常に見物と隣り合わせの作業であり、板海苔への加工は手間のかかるものであった。このような条件下で生産されてきた板海苔は、近年まで貴重で高価なものであり、白米と組み合わせた巻きずしは祝いの事のごちそうとして高く位置づけられてきた。現在でも根強く残るノリを贈答品とする習慣のなかに、このようなノリの採取・加工の歴史やそれに伴う住民の価値観をかいま見ることができると、奈良時代の『常陸国風土記』や『出雲風土記』には「紫菜」とあり、

平安時代の『倭名類聚抄』では紫菜をムラサキノリと読み、アマノリのことと説明している。ノリもコンブ同様に古代には、調、交易雑物、齋宮の月料、仁王経齋供養料、供御などに使われている。また、鎌倉時代の『吾妻鏡』ではアマノリが皇上に進上され、伊豆国がアマノリを供御として鎌倉京都に貢納したとあり、ノリは高貴な人への献上品として貴重なものであったことがうかがえる。

出雲地方の島根県平田市十六島は古くからウップルイノリの産地として知られていたようで、日本でも珍しい「島もち」の制度や紫菜島神社の神事が伝承されている。島もちとは農家が田畑を個人所有しているのと同じように、ノリが自生する平らな岩場を個人名義で代々世襲する制度である。そして、このノリ島が見渡せる紫菜島神社では毎年旧暦の二月初午の頃にノリ採取の感謝祭と豊作祈願の神事が行われ、今日でも形を少しずつ変えながらではあるが行われている。これらの習慣は食材料としてのノリだけでなく、地域住民の生活と生業としてのノリ採取の関わりを物語るものである。アマノリ類のなかでも上質とされるウップルイノリは、長いものになると一メートルにも生長する。指にクルクルと巻きつけて採取されたノリは、長いまま板状に広げて天日乾燥される場合が多く、隙間のあいた板海苔であった。この地方では、現在でも正月雑煮には生ノリは欠かせないものであり、また、乾燥海苔を小さくほくして一

升瓶に入れ保存し、日常的にも使われている。

一方、アサクサノリという名称が文献上に出てくるのは、江戸時代初期からである。江戸時代後期の『東都歳時記』には、「江戸に幕府が開かれる前の天正の頃（一五七三―一五九二）までは浅草の地にもノリが自生し、海辺の漁民や農民が採って干し広げて売り歩いてきた。その後、幕府の開設により浅草周辺も繁盛してくると、海岸沿いが埋め立てられてノリの自生場所は減少してしまつた。ちょうどその頃より葛西、品川、大森などでとれたノリが浅草に運ばれて加工され、浅草海苔の名で出回つた」といった内容が記載されている。江戸の繁栄と共に需要は増し、浅草海苔問屋もでき、浅草雷門の市は賑わつたという。この需要の増大に対処するため、ヒビ立による半養殖技術を生み出して行くことになる。これは竹や樹木の枝を海に立ててノリの自生場所を作つてやるもので、ヒビ棚は品川から大森まで二里（約四七キロメートル）にも及んだといわれる。

アサクサノリが現在と同じ「すきノリ」に加工されたのは、江戸時代中期頃からといわれ、江戸時代後期の『広益国産考』などには、ノリを刻んで水に溶かして簞に薄くすき、板ノリに加工する方法が記載されている。すでに行われてきた紙漉の手法が応用されたものである。この養殖や加工の発達は海苔問屋の誕生や仲買商の開業につながり、上質で高価な浅草ノリが各地に流通して

いくことになる。また、このアサクサノリの養殖技術は内湾をもつ各地に広まり、全国的な祝いの海藻としてのノリの普及に大きく関与していったといえよう。

日本がノリの自生に適した海環境を持ち得たことを基盤とし、島もちや紫菜島神社の神事にみられたような生業にまつわる制度や住民の精神活動、アサクサノリの誕生にみられた流通・消費の社会情勢、養殖・加工技術の発達、さらには幕府の庇護など、さまざまな社会環境が影響をおよぼしあい、日本独自のノリの食文化が形成され、伝承されてきたといえよう。

「主な参考文献」

- (1) 『故事類苑』 植物部 普及版 吉川弘文館
- 一九八五。(2) 『諸本集成倭名類聚抄』 本文編 京都大学文学部国語学国文学研究室編 臨川書店 一九七七。(3) 『日本山海名産図説』 第一巻、日本産業史資料(1) 総論、浅見恵・安田建訳編 科学書院 一九九二。(4) 『本朝食鑑』 一巻、人見必大著・島田勇雄訳注、平凡社、一九七六。
- (5) 『東都歳時記 太田区立郷土博物館編』 絵画にみる海苔養殖、一九九一。(6) 『広益国産考』、飯沼二郎翻訳・現代語訳、日本農書全集第一四巻、農山漁村文化協会、一九八二。(7) 今田節子著『海藻の食文化』、成山堂書店、二〇〇三。(8) 島利栄子著『山国からやってきた海苔商人』、郷土出版社、一九九一。

石に刻まれた六部

小嶋博巳

霊場巡りは一回休ませてもらって、今回は霊場をめぐる人についてである。

鳥取に向かう智頭急行を大原駅で下りてバスに乗り換え、吉井川支流の吉野川沿いに林野方面に下ってゆくと、途中に立石という集落がある。昨年三月までは岡山県英田郡大原町立石と呼ばれていた地区で、英田郡と勝田郡にまたがる大合併によって新市が誕生し、美作市立石となった。写真は、この集落の一角、荒神屋敷下と呼ばれる場所に立つ石塔（部分）である。自然石の中央上部に阿弥陀を表す種子キリークが刻まれ、その下に、箱のようなものを背負って歩む人物が浮き彫りされている。少々奇妙な風体だが、これが、日本全国にわたって霊場をめぐる歩いた六十六部の巡礼者、いわゆる六部である。

六十六部という巡礼は江戸時代と運命を共にしたと言つてよく、わずかに門付けを専らとする業者らが明治以降も徘徊を続けていたものの、それもせいぜい大正時代までのことであつた。したがって、その姿を見たことがあるといふのは、すでにかんりの高齢者に限られてしまつてゐる。しかし、江戸時代の風俗画にはしばしば六部が描かれることがあり、その特有の風体をわれわれも確認することができる。さらにこのように、各地に遺る石造物のなかに、思いがけず、その姿を刻ん

だものを見出すことがある。これまで、そうした事例は全国で一〇例ほど知られていたが、ようやく岡山県下でも確認されたことになる。

写真ではわかりにくい心配があるが、箱のように見えるのは背の高い笈で、腰の前には鉦をつけ、右手にそれを鳴らす撞木を、左手には杖を持っている。笠は、剃髪した巡礼者の頭には触れ



ておらず、笈の上部に直接取り付けられているようである。やはり、少々特異な格好と言わざるをえない。像の左右には、「文化十四年三月吉」および「筑前国 郡 村俗名宗兵衛」の銘文がある。宗兵衛というのが、この六部の名であろう。

まず一般的なことから言えば、ここに刻まれて

いるのは、近世中後期の六十六部の典型的な姿である。背の高い笈は、多くの場合、その内部に仏を収めており、しばしば笈の丈が負つ者の背を越えるほどになるのは、収められた仏像が必要以上に大きく、立派なものだったからである。つまり、彼らは開扉して人に拝ませることを意図して、立派な仏を背負って旅をしていたのであった。もちろん、門付けのためである。笠が頭に載らずに笈に取り付けられているのも、ひとえに笈の背が高すぎて通常の笠の被り方ができないからにほかならず、このスタイルは絵画資料でも確認することができる。笈中の仏はさまざまであったが、観音や地藏、とくに地藏であることが多かったようである。腰の鉦もまた、六部の定番の採り物であった。これは念仏をあげるための道具で、彼らは鉦を叩き、念仏を称えて門付けをしたのであった（一茶に「枯原や夫婦六部が捨念仏」の句がある）。数年がかりで日本全国をめぐる巡礼が必然的に門付けという行為を組み込まざるをえなかったこと、「法華経を六十六か国の霊場に奉納する」という理念に反してこの巡礼が種々の信仰の入り会地になっていたこと、が彼のスタイルにも現れている。

では、この宗兵衛という巡礼者が、とくにここに姿を刻まれたのはなぜか。

じつはこの石塔の隣にもつ二基、同一人にかかわる供養塔がある。こちらは「奉納大乘妙典六十

六部日本回国供養」「文化九壬申三月吉日」「筑前国鞍手郡山口邑行者宗兵衛」とあって、いわゆる廻国供養塔に属する。廻国供養塔は六十六部巡礼の成就とともに巡礼者の郷里に造立されるケースがもっとも多いが、この供養塔はそうではなく、筑前からやって来た宗兵衛が、巡礼の途中、この美作の地で何らかの機縁を得、人びとの援助のもとで供養の法要を執り行なって造立した（してもらった）ものである。ちなみに筑前国鞍手郡山口村は現在の福岡県宮若市山口で、小倉と博多のちよど中間あたりになる。

こうした例はけっして珍しくなく、廻国供養塔造立の一つのパターンである。ただ、文化九年（一八二二）に廻国供養塔を造立し、翌十年に今度は姿を刻んだ石塔を別に建てるといのは、やはり普通ではない。石塔造立の経済的負担はけっして小さいものではなく、ましてレリーフを伴うものとなると費用は倍加しよう。よほどの理由がなければならぬ。残念ながら、この点について地元の立石には何も伝えられていない。類例なのかには客死した六部を一種の流行神として祀るために建てられたものもあるが、これは紀年に「吉日」とあり、また法名（戒名）もないから、そういうことではなからう。おそらく宗兵衛は、長く立石に逗留し、宗教者としての活動によって多くの帰依者を得た人物であったと想像するほかない。立石から二つ西隣にあたる田井という地区の旧

家に、やはり文化年間、阿波の六部が滞在し、地元の有力者たちと協力して大日堂を建立、そこで断食修行をおこなったという記録が残る。その堂も現存している。六十六部という巡礼は、民衆化した他の多くの巡礼とは異なり、近世に入ってもなお中世的な遍歴の姿をとどめていた。別の言い方をすれば、宗教者の遍歴修行と民衆の巡礼が完全に分化しないまま、歴史上から姿を消してしまっただけである。

体験的生活文化史 昭和編 その五

新田義之

前回と前々回にもちよつと触れたように、私はいわゆる新制中学校が発足した昭和二年四月に開校最初の一年生として入学した。校長も先生たちも在校生もみな、旧制度の高等小学校がそっくりそのまま新制中学校に移行したのだから、前の年に高等科二年だった組が進級して最上級生である中学三年となり、昨年の高等科一年生が今年は中学二年生になったわけである。この連載文の「その一」にこの年に一年生になった私を「新制中学第一期生」と書いたのは間違いで、正式にはこの年の三年生を第一期生と呼ぶべきであった。ここに訂正しておく。

新制第一期生が卒業するのは翌年二月だから、彼らのうちの上級学校進学希望者を受け入れるために、政府は新制高等学校を翌年四月から発足さ

せる必要に迫られた。ここにはしかし大きな困難が控えていた。新しい学制は各学校間に制度上の格差のない、いわゆる六三三四年制単線型構造であったから、これまでは上級学校進学準備校だけでなく、商業学校、農学校、工業学校など多くの実業系学校にちらばって進学していた旧尋常小学校卒業生を、すべて同格の「新制高等学校」に収容しなければならなかったからである。

さて、私の育った石川県ではいわゆる学区制を敷き、各学区内に存在する全ての公立旧中等学校を一つに統合して、一学区に一つの公立高校を置き、学区内の中学生にはこの学校の他の、つまり他学区の高校への進学を認めないことにすることで、この難問を解決した。しかもここで蛮勇を振るい、旧制中等学校在学中の四・五年生で学区内在住者を全て、新制高校一・三年生として、学区内高校に移してしまっただけである。

これはどういふことかと言つと、昭和三年四月に、私の住んでいた土地の旧制高等女学校と農学校とが合併して新制高等学校が生まれ、そこに県内各地の名門校を含めての全ての旧制中等学校から学区内在住生徒が移されて、例えばかつての県立第一中学校四年生も、県立諸実業学校四年生も、ともに新制××高等学校二年生に編入されてしまつたことを意味する。

学校格差が人間の価値の格差と勘違いされている現代では、こんなことは到底断行できるとは思

えないが、当時は何が根底からくつがえっても不思議ではなく、そこから新しい秩序が芽生えることを期待する方に人々の心が動いていた。学制の大改革が実行できて現在の姿が生まれたのも、やはり時代の趨勢によるものだったと言えよう。

さて、私はこの混乱期に、生まれたばかりの新制中学の一年となったわけである。授業は四月から始まったが、また教科書が刊行されていないので、ほとんどの授業が先生の自由にまかされていた。そのうちに大車輪で印刷された教科書が配布されたが、それらはまた裏表に数ページ分が印刷された大きな紙で、受け取った生徒たちは自分でそれを折りたたみ、重ね合わせて綴じ、最後に袋になっている縁をナイフで裁断して冊子にした。フランスの洒落た本にページ未裁断のものがあるが、私たちはそれより二段階前の「ページ折り」と、その次の「製本」術まで教わったわけである。これでは授業しているのが遊んでいるのか分からない。幸いに私の家には父や兄が使った旧制中学校の教科書が、全学年全科目分そっくり残されていたので、読み物に飢えていた私は、それらを片端から読んで、二年生を終わる頃には全部読み終わっていたと思う。学校では休み時間に先生たちも加わって、バレーボールや卓球などで遊んで帰ると本に読みふけり、木工細工やラジオの組み立てやら、ブリキを切ってハンダづけをしてサイレンをつくるやら、姉のつかったリードオルガン

を弾いて和声法の問題を解いたり作曲の真似をしたりして、十分にこの時期を楽しんだ。食料も乏しく着るものも不足した頃で、映画も農村巡回公演が一年に数回ある位のものだったが、明るく開放感に満ちた中学生時代だったと思う。

しかし戦争のもたらした悲惨の克服はまだできていなかった。シベリヤに抑留されていた兵士たちの帰国も完了しておらず、南方で転戦していた軍の生き残りも十分に確認できていなかった。戦地に派遣されたまま消息不明になった夫の帰国を待ちながら、舅の世話をしている若妻が私たちの家の近くにいたが、やがて妊娠して可愛い男の子を産んだ。通学の途中に私は毎日その家の前を通ったが、子どもは元気に育っていくのに、とうとう夫は戦地から帰らなかつたようである。この子の父は戸籍上どう扱われたものだろうか。出生の秘密を村人たちは守ってくれるだろうが、子どもが後にそれを知って、不条理な重荷を一生背負ったかも知れない。

帰らぬ夫を待っていたある女が、ある日池に浮かんでいた事件もあった。下駄がきちんと揃えてあったことから自殺とみなされたが、遺体には打撲傷が数多くあり、村人たちはみな真相を知っていた。戦地から帰ってきた男たちが毎夜尼寺に集まって、酒をのんで戦地の記憶を消そうとしていたが、その内に尼さんに子どもができてしまったこともあった。

戦後農村社会のそういう一面を眺めながら、中学生の私は軍国主義からアメリカ式民主主義に急変した新制度の中で、のびのびと自由に遊び、好奇心のおもむくままに自学自習する幸福を満喫していたのであった。

『ザ・有頂天ホテル』と『世間胸算用』

西鶴研究こぼれ話 5

広嶋 進

先頃、三谷幸喜脚本・監督の『ザ・有頂天ホテル』（フジテレビ・東宝制作、二五年）を切り初日の映画館で見た。館内は普段と違って、若い人に混じって夫婦連れや中年の観客が多く、和やかで活気に満ちた雰囲気が漂っていた。

この映画は、大晦日の高級ホテルを舞台にして展開する。冒頭のシーンでホテルの時計がまず映し出され、針は午後九時五十分をさしている。午前零時の新年のカウントダウン・パーティまであと二時間十分。映画はそのパーティ開催までに起こった出来事を、現実の時間に沿ってリアルタイムで映し出していく。

年の瀬の大晦日のホテルにはいろいろな客がやってくる。マン・オブ・ザ・イヤーに選ばれた研究者とその妻、マスコミから追われている汚職国会議員と秘書、パーティに出演する芸人、大物演歌歌手。そしてそれらの客を受け入れるホテルの従業員たち。映画は宿泊客の要望やトラブルを解

決しようとするホテル・スタッフの奮戦を中心にいくつかのエピソードが平行して語られていく。

大晦日の物語と言えば、ただちに思い起こされるのは井原西鶴の『世間胸算用』（一六九二年刊）である。三谷監督も映画公開に先立って、次のようなエッセイを書いていた。

「世間胸算用」という作品は、どつやらもろ大晦日が舞台らしい。しかも様々な登場人物がその一日をどうやって過ごしたかをオムニバスの描いているといつではないか。／早速買って読んでみる。」（三谷幸喜のありふれた生活「朝日新聞」二〇〇五年一〇月七日）

そして『世間胸算用』の感想を記す。

僕はほとんど日本の古典文学を読んだことなく、西鶴の作品も実際に接したのはこれが初めてだったが、あまりに面白いのでびびくりした。

どのようところが「面白かった」のかというと、当時の人々が、いかにして借金取りから逃げたか。知恵の限りを尽くした、その秘策の数々には思わず笑ってしまつた。

といつ。ちやうど

一つ一つの話は短いのだが、それがモザイクのように積み重なった時、大きなうねりのようになつて、まるであの時代そのものを俯瞰で見つめているような、壮大な気分させら

れる。そしてそれは僕が自分の映画でやりたかったこと。

として、「西鶴に三百年以上も先を越されていたら」と悔しがる。三谷監督は「長い年月、人々に読み継がれる」「古典の「力」を「再認識」したとまで書く。

しかしながら、監督も言つよつに『胸算用』は「金銭にまつわる話がほとんどで、借金にあえぐ当時の庶民が、いかに年の瀬を乗り越えて正月を迎えるか」といつエピソードが、次々に出てくる。「短編小説集」であり、劇映画とは構造を異にする。彼が「オムニバスの」といつよりは、短編小説集といった趣だった」とする指摘は正しい。シナリオ用語に「グランド・ホテル形式」といつ術語がある。これは映画『グランド・ホテル』（一九三三年）に代表される形式で、特定の場所で、数人の人物のエピソードが平行して、または交差し、語られる形式をいう。

実は、このたびの『ザ・有頂天ホテル』も右の『グランド・ホテル』の挿話とスタイルを意識して、というよりも下敷きにして作られている。『グランド・ホテル』では五人の宿泊客の話が語られるが、『ザ・有頂天ホテル』の最も豪華な部屋は、それらの客を演じた俳優の名前にちなんである（バリモア・スイート、ライオネル・スイート、クロフォード・スイート、ガルボ・スイート）。西田敏行が演じる大物演歌歌手はリサイタ

ル前になつて自信をなくし、死にたがっている。これは『グランド・ホテル』でグレッタ・ガルボが演じた自信喪失のバレリーナを明らかになぞっている。麻生久美子が演じる富豪の愛人が窃盗をするのは、『グランド・ホテル』の盗賊紳士の行為の変形である。

『胸算用』に収められた二十の話は「話ごと」に完結し、それぞれの話は演劇のように構造的に繋がりが合わない。二十回大晦日を迎え、二十回元旦を迎えることが繰り返される。大晦日を舞台とする同じような話を反復することによって、各章の商人の階層や暮らしが対照され、対比されていくといつ仕掛けが施されている。

映画『グランド・ホテル』では、ジョン・バリモアの泥棒男爵が他の客と関わり、背景や出自の異なる宿泊客の個々のストーリーが次第に絡み合つていく。男爵自身は悲劇的な結末を迎えるが、他の登場人物は彼と関わるることによって人生が変わつていく。そして客人たちは翌朝グランド・ホテルを出て行くのである。

では、我が『ザ・有頂天ホテル』はどうなのであるうか。『胸算用』も『グランド・ホテル』も「金」と「階級」を主要なモチーフにしつ、作品が人生と社会の縮図となつていた。そして長い年月を経ても鑑賞に堪える「芸術作品」に仕上がつていた。これに対して、本映画ではそいつた「金」や「階級」に対する視点は意識的に避

けられ、俳優たちが生き生きと動き回る楽しい「娯楽作品」に仕上がっている。本作品は「娯楽作品」として「ウエルメイド」であり、一級品であるが、私にはその点が残念であった。三谷監督の次回作を期待している。

不思議な出会い (その五)

ハワイの日系社会と坂巻ファミリー

横山 學

私がエイコ・カギモトに初めて会ったのは、十五年ほどまえのことです。宝玲文庫(フランク・ホーレー)の琉球資料をハワイ大学にもたらした坂巻駿三の人物研究を進めるためでした。エイコは駿三の末妹で、広島県出身の日系二世であるリチャード・カギモトと結婚して、ホノルルの郊外にお住まいとのことでした。

約束の場所は、アラモアナショッピングセンターの山側の一隅、アメリカンスタイルの老舗レストランでした。緊張気味の私を、カギモトご夫妻は暖かな笑みで迎えて下さいました。エイコさんは、ほっそりと小柄ながらきびきびした話振りで私の理解を確かめながら大切なところは単語をゆつくりと繰り返してくれる、細やかな心配りが印象的でした。この出会いによって、私はハワイの日系人の様々な生き方を知る機会に恵まれることになりました。

坂巻駿三は、ハワイでは成功した日系人のひと

りとして著名な人物です。駿三夫人と一人息子が親族との交際を好まないこともあり、末妹のエイコさんが、坂巻一族の次の世代を束ねる役割を果たしていました。彼女は機会があることに、私たちのために親族を順次集めて、何度もホームパーティーを開いてくれました。アラモアナで開業している歯科医や精神科医、ハワイカイの突端に居を構え、何人もの養子を育てている歯科医。カウアイ島で環境と排水処理の問題に取り組む会社を経営する事業家。日本テイストとハワイ語を組み合わせ、ウィットに富むTシャツを創作するデザイナー、ガーディナー。皆それぞれに、志高く活躍しています。「ルーツ」が大ブームで、英国のレジスター・オフィスにも、先祖の出生記録を探しにアメリカ人が行列した頃でした。坂巻家の三世たちも自分たちの家系を知りたがっていました。私の調査に関心を持ってくださったのも、そこに理由があったのでしょうか。こうして、エイコさんの面倒を見てやるべき人のひとりに、私も加えてもらうようになりました。例えばホノルルに着いて挨拶に行く、毎回「生活キット」を手渡してくれました。小分けにした調味料や米、果物、スパムやコンビーフの缶詰で、短期の一人暮らしを開始するにはとても有難い物でした。

ハワイでは大学の関係者をはじめ、様々な日系人や日本人に会ってきました。岡山県人会の会長ご夫妻と会食し、岡山からの移民の話伺う機会

もありました。夫人はホノルル茶道会で中心的な役割を果たしていらつしやるとのことでした。街角の各所で見かける「ABCストア」の初代社長は、岡山県出身の二世で、米国本土の大学で薬剤師の資格を取り事業経営に成功したスマートなシエントルマンでした。カイルアに住む二世のハルさんは、花のことは「サクラ」、鳥のことは「スズメ」式の片言の日本語と、充分とはいえない英語で、日常生活について色々なことを教えてくれました。ハワイの日本人の集落に生まれ、貧しく、道端のバナナをもちで食べながら学校に通ったこと。頭上を越えてパールハーバーの爆撃に向かう戦闘機の爆音を聞いたこと。そして、戦時中の迫害に遭いながらもヨーロッパ戦線に志願しなければならなかったことなどを、折々に語ってくれました。沖縄県系満出身の不動産会社の女社長とも親しくなりました。彼女はハワイ大学で学んだ後にホノルルで仕事を始め、日本人の不動産業者として活躍しています。

「日本語が話せる・書ける」が今も売り文句の職業があります。弁護士、医者、不動産業者、保険業など、ある年代以上の日系人にとって、困った時に頼らなければならぬ大切な存在です。そのことは一方で、ハワイは日本人が日本人のままに入りやすい社会だということでもありましょう。ハワイの豊かな光と自然に取付かれたカメラマンが、実家である岡山市内の書店の支店をホノルル

に出しています。若い世代では、マリンスポーツに惹かれて住み着く人が増えているようです。

これらの人びとと坂巻家の人々とは、何となく肌合いが違っていました。何故だろうと考えるうち、彼らが日系社会と繋がるの薄いことに気づいたのです。その理由は、坂巻家の歴史を辿るうちに解ってきました。

駿三やエイコの父は東京出身の坂巻銃三郎（明治二年生）、母は広島県出身の山中ハル（明治十二年生）で、坂巻家は代々津軽藩の江戸詰め藩士でした。銃三郎は十六歳のとき、精勤賞まで受けた大蔵省の給仕を辞めて、密航して米国本土に渡りました。働きながら英語を習得し、単語辞書まで編んだと聞いています。日本へ帰国の途中、耕地請負業の岩崎治郎吉と出会い、ハワイに留まりました。ハワイ島オアローの製糖業に携わり、多くの日本人耕地労働者とは異なった暮らしをしていました。家庭内でも英語で話させ、熱心なクリスマスチャンとして活動し、子供たちを放課後の日本人学校に通わせることはありませんでした。日本人の友達ができなかったと、残念そうにエイコさんは語っていました。銃三郎は巡回判事をつかまえて子供が市民権を得られるよう交渉しました。次男の譲治と三男の駿三は、ハワイで最初に市民権を得た日系二世です。銃三郎は、総ての子供たちに最高の教育を授け、子供たちもその期待に応えました。長男のポール（福男）は製糖工場にある

郵便局長（政府公務員）、次男のジョージ（譲三）はジャーナリスト、三男の駿三は大学教授、四男は音楽家、五男は医者として、それぞれ活躍しました。

不思議なことに、日本の坂巻家からも熱心なクリスチャンが出ています。銃三郎の伯父には仙台の山本有成、従兄弟には横浜の山鹿旗之進がいて、ともに社会的に貢献しています。日本国内の関係者とのお付き合いも始まりました。千葉県の行徳には坂巻家の菩提寺があり、そこから数名の縁戚者にたどり着きました。世代が移り、数十年の間、ハワイ坂巻家との音信が途絶えていたとのことでしたが、色々とお話を重ねてゆく中で懐かしさが蘇り、ハワイへ出かけ、再び親戚同士のお付き合いが始まったのです。調べる側としては順番に辿っているのですが、尋ねられる側としてみれば突然に、閉じてしまっていた記憶の蓋を無理やりこじ開けられる、あるいは思い出の世界に引きずり込まれることになるのですから、迷惑なこともあったかもしれません。

日系人社会との繋がりは薄いとはいっても、坂巻家も三世までは、結婚の相手は日系人同士でありました。エイコさんの家族の場合も同じでした。我が家とカギモト家とが親戚同様に付き合うつちに時は流れ、やがて四世が家庭を築くようになりました。先日送られてきたエイコさんの家族写真を見ると、ちょっとした変化がありました。ポール

トガル系やアフリカ系アメリカ人も加わり、五世も生まれたのです。シドニー・ギョリック（一八七〇―一九四五）がハワイの人種の混在について比喩的に語った「人種の坩堝（るつぼ）」という言葉があります。いま本当の意味でそうなりつつあるのでしょうか。

坂巻家のことは「ハワイ日系二世坂巻駿三と津軽藩江戸詰坂巻家」『江戸町人の研究』第六巻、吉川弘文館、ISBN4632-0349-4に詳しく記しました。

編集後記

『生活文化研究所年報』第十九輯が出来上がりました。ご希望があればお知らせ下さい。送料をご負担頂ければお届けいたします。

去る六月（四日）（土曜日）に、恒例の生活文化講演会を開催しました。今年は成城大学の小沢詠美子先生を講師にお願いして、「江戸ッ子と浅草花屋敷」（演題）をお話して頂きました。投稿のお約束を得ましたので、次の『生活文化研究所年報』第二十輯に掲載いたします。

http://www.ndsu.ac.jp/1000_gui/d/1700_jnst/1710_ja01.htm

新刊紹介。新田義之（元所員）著『澤柳政太郎 随時随所楽シマザルナシ』（ミネルバ日本評伝選）ミネルバ書房、ISBN4623-04669-1 三千円 六月十日刊。（Y）